

明日へジャンプ！

～大きくなるっていうことは～

小学部 前川 将輝

1 はじめに

今回は学習指導要領『特別の教科 道徳より「B 主として人とかかわりに関すること」感謝(8)』をもとに授業を展開していく。日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。また自身の成長を実感し、周囲の人々の支えに気付くことをねらいとして授業を行っていく。決して指導者の価値観の押し付けではなく、児童が主体となり、児童自ら感謝の気持ちを抱けるよう工夫しながら展開していきたい。

2 授業の概要

- 1) 対象児童 小学部6年(6名)
- 2) 授業名 道徳「自身の成長を実感し、周囲の人々の支えに気付こう」
- 3) 日時 令和3年11月10日(水)第3限(10:25~11:05)

3 授業のねらい

1) 対象児童の実態と課題

本学級は、小学部の最高学年であり日常生活や保健の学習を通して、「卒業後の進路」や「体の発達」といった今後の自身の生活について学習をし、来年度は中学部に進学することや自身の体が大人へと変化していくことを概ね理解している。しかし、これまでの自分を振り返り、自分たちが幼少期から何ができるようになったのか、どこが成長してきたのかを具体的に振り返る経験が少ない。また、児童が保護者に対して否定的な言葉を言ったり態度を取ったりするなど親に対しての態度に課題がある。これまでの自分自身を見つめ直し成長を実感することや、自身の生活や成長を支えてくれた周囲の人々の行動や気持ちを知り、感謝への気付きに課題がある。

2) 授業の目標

- (A) 自身の成長を知り、身近で成長を願ってくれる周囲の人の行動や気持ちに気付く。
- (B) 赤ちゃんの時に支えがあったことに気付き、どのように感じたかをまとめることができる。
- (C) 成長を支えてくれた周囲に感謝の気持ちを持ちながら、今後も生活しようとする態度を育てる。

4 授業の内容と経過

「自身の成長に気付くこと」と「成長を支えてくれた周囲の人への行動、気持ちに気付く」の2点を身に付けることができるよう授業を行った。「自身の成長」については、現在と過去の写真を見比べたり、低学年時の担任から聞き取りを行ったりした。写真の見比べでは、児童が自分なりにどこが成長したのかを視覚的に比べることで主体的に取り組めるよう留意し、身長や服の大きさ等の体の変化について注目を促す。さらに、聞き取りを行うことで、自分では気付けなかった内面部分の変化について知り、

より深く自身の成長を実感することができるよう展開した。それらの気づきや感じたことを「自分新聞」として整理し、自身や友だちの成長を視覚的に感じることができるようにした。また、「支えてくれた周囲の人々」では、赤ちゃんの人形を抱っこする体験活動を取り入れ、赤ちゃんの重さを感じたり、児童には内緒で保護者から借りた名前の由来や親の願い、また乳幼児期の写真を授業で提示したりした。その写真では自身の姿だけでなく背景にも注目を促し、自分は色々な人から支えられ、愛されて育ったことに気付けるよう発問や板書を工夫しながら行った。

5 結果

乳幼児期の写真を用い、「これは誰でしょう？」という問いかけに、児童たちはクイズ感覚で活動を楽しみ主体的に学習へ参加できた。また、自身の姿だけでなく写真の背景（親や兄弟、哺乳瓶等）に注目させT2と連携を取りながら過去の経験を引き出す発問をすることで、「一人で歩けないから抱っこをしてもらっていた」「一人で飲めないからミルクを飲ましてもらっていた」等と赤ちゃんの時には周囲の支えがあったことに児童自ら気付くことができた。また、授業の導入では成長の実感を得るために赤ちゃんの人形を抱く体験的活動を取り入れた。児童自ら人形に手を伸ばし、抱きかかえて重さを感じたり、表情を覗き込んだりと興味深く取り組む様子が見られた。これらの授業展開を通して、まとめの「いろいろな支えに気づき、どう思ったか」を自由に書く場面では、「ありがとう」「支えてもらってうれしい」「happy」等、指導者が感謝の気持ちを押し付けることなく児童の気持ちを引き出すことができた。

授業後も赤ちゃんの人形を抱っこしたり、自分新聞や乳幼児期の写真等に再度触れたりすると、興味が尽きない様子であった。自分新聞に関しては、「持ち帰って親に見せたい」と保護者と共有しようとする姿も見られた。

6 考察

今回、周囲の支えに気づき「ありがとう」や「支えてもらってうれしい」等の感謝の言葉や気持ちを引き出すことができたのは、児童自身が自分の過去を振り返ろうとし、そして自ら周囲の存在を考えようとしたからである。決して指導者の押し付けでなく、児童の考える力を大切に、児童主体の授業づくりが展開できた結果が感謝の気持ちを育んだと考える。

今後の生活では、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをいただき、進んでそれに応え、思いやりの心をもって人と接することでできるようになることを願う。

7 まとめ

今回は児童が自ら感謝の気持ちを抱くように授業を設定する必要があった。指導者が感謝を押し付けるのではなく、児童が主体的に考え、自ら感じ取ることができなければ感謝の気持ちを育むことはできない。そのため、乳幼児期の写真を用いて視覚的に過去を振り返る、人形を用いた体験活動、T2と連携した発問の工夫等が有効的であったため児童の主体性を引き出すことができた。事前の授業検討会では、授業者の発問の工夫やサブティーチャーの働きかけについてもあらかじめ考えておくようにした。そのことによって児童が行き詰まった際に、授業者が適切な言葉かけを行ったり、サブティーチャーが適切に働きかけたりすることに繋がったと考える。本主題のみならず日頃から児童が主体的に授業に取り組むことができるよう、サブティーチャーと考えていくべきだと感じた。